

第 63 回 SGRA フォーラム概要

第 4 回「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」円卓会議 「『東アジア』の誕生－19 世紀における国際秩序の転換－」

日 時：2020 年 1 月 8 日（水）～12 日（日）

会 場：フィリピン・アラバン市ベルビューホテル、フィリピン大学ロスバニョス校

主 催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

共 催：科学研究費新領域研究「和解学の創成」、早稲田大学東アジア国際関係研究所、
フィリピン大学ロスバニョス校

助 成：未定

■フォーラムの趣旨：

19 世紀以前の東アジアは、域内各国の関係は比較的に疎遠で、各国が個別に外国との関係を結んでいた。しかし、西洋の諸国がグローバル化の運動を北太平洋まで及したとき、日中韓の関係は政治・経済・通信のいずれの面でも緊密化し始め、その中で「東アジア」を一体のリージョンと見なす想像力が生れた。今回は、このような東アジアの国際秩序の変化、その中で各国の国内秩序の変化を主題に国際対話を試みる。

西洋が強い商業関心と新たな交通・通信・軍事技術をもって該地域に再登場したとき、中国・日本・朝鮮はどのように西洋を認識したか。伝統的な知の体系とそれはどう絡み合ったのか。いずれの国でも反発と同時に新たな知への憧憬が生れ、一方では伝統への挑戦、他方では伝統の再造が試みられた。例えば、日本では、洋学が学校教育の主軸に据えられる一方、秩序の核心に天皇を置き、家族では儒教的な男性優位観が一般化した。この西洋への反発と憧れは国ごとに組み合わせ方が異なり、それは今に至る文化の相違を生み出すことになった。

西洋の進出は各国に自衛を促し、結果的に各国を「国民国家」に変えていった。遅速の差はあっても、国境を明確化し、内部の団結を促すナショナリズムを生み出すことになったのである。その一方、西洋の持込んだ海運網は、人々を国境の外に誘うことにもなった。中国からは東南アジアに加えてアメリカ大陸に大量の出稼ぎ労働者が向い、以前は皆無だった日本からも移民が海を越えるようになった。朝鮮では移民は少なかったが、外国留学生や政治亡命者が現れ、やがて国の将来に大きな影響を及すようになった。ナショナリズムの形成と国境を越える移民・留学・亡命との交錯は、従来の東アジアの秩序を国際関係と国内秩序の両面で大きく変化させ、20 世紀の大変動を準備することになる。

今回のフォーラムでは、およそ以上のような問題群を取上げ、3 つのセッションに分けて各国の事情を比較し、討論して、19 世紀東アジア世界に起きた大転換の全体像を把握したい。

なお、円滑な対話を進めるため、日本語⇄中国語、日本語⇄韓国語、中国語⇄韓国語の同時通訳をつける。円卓会議の講演録は、SGRA レポートして 3 カ国語で発行し SGRA ホームページに掲載する。

■フォーラムの経緯：

渥美国際交流財団は 2015 年 7 月に第 49 回 SGRA(関口グローバル研究会)フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、先ず東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる智恵を東アジアに供給することの意義を確認した。

このプラットフォームに「国史たちの対話」のコーナーを設置したのは 2016 年 9 月のアジア未来会議の機会に開催された第 1 回「国史たちの対話」であった。いままで 3 カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められていない、という意識から、先ず東アジアにおける歴史対話を可能にする条件を探った。具体的には、三谷博先生（東京大学名誉教授）、葛兆光先生（復旦大学教授）、趙珖先生（高麗大学名誉教授）の講演により、3 カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱われているかを検討した。

第 2 回対話は、自国史と国際関係をより構造的に理解するために、「蒙古襲来と 13 世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。2017 年 8 月北九州にて、日本・中国・韓国・モンゴルから 11 名の国史研究者が集まり、各国の国史の視点からの研究発表の後、東アジアの歴史という視点から、朝貢冊封の問題、モンゴル史と中国史の問題、資料の扱い方等について活発な議論が行われた。この会議の諸発表は、東アジア全体の動きに注目すると、国際関係だけでなく、個別の国と社会をより深く理解する手掛りも示すことを明らかにした。

第 3 回対話はさらに時代を下げて「17 世紀東アジアの国際関係」と設定した。2018 年 8 月ソウルに日本・中国・韓国から 9 名の国史研究者が集まり、日本の豊臣秀吉と満洲のホンタイジによる各 2 度の朝鮮侵攻と、その背景にある銀貿易を主軸とする緊密な経済関係、戦乱の後の安定について検討した。また、3 回の国史対話を振り返って次に繋げるため、早稲田大学主催による「和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証」のパネルディスカッションが開催された。

この円卓会議は 2016 年度から毎年 1 回、全部で 5 回開催する。残りの 2 回は近現代をテーマとして取り上げる。

また、3 カ国語に対応したレポートの配布とリレーエッセイのメールマガジン等により、円卓会議参加者のネットワーク化を図る。

■日程（2020 年）

1 月 8 日（水）到着、午後 6 時～歓迎夕食会

1月9日（木）午前9時～午後5時30分 開会と基調講演、円卓会議（発表①～③）

発表セッションは90分で、3名の研究発表（各20分）

※終了後に質問票を提出してもらい、翌日の討論内容を検討

1月10日（金）午後2時～午後5時30分 円卓会議（討論、総括＋パネルディスカッション）

1月11日（土）分科会で若手研究者のセッション（日本語又は英語）

1月12日（日）解散、ご希望の方はスタディツアー（ツアー代金は自己負担）

■プログラム

第1セッション：開会 司会：李恩民（桜美林大学）				
開会挨拶	Cho Kwang	趙 珖	韓国国史編纂委員会	
歓迎挨拶	Maquito Ferdinand	F. マキト	フィリピン大学ロスバニョス校	
基調講演	Mitani Hiroshi	三谷 博	跡見学園女子大学	「アジア」の発明
コメント	Song Zhiyong	宋 志勇	南開大学	

【研究発表】日中韓から各3名：各国の研究が、①西洋の認識、②伝統への挑戦と創造、③国境を越えた人の移動をテーマとするように。発表時間は各20分。

第2セッション：西洋の認識 司会：南基正（ソウル大学）				
日本	大久保健晴	Okubo Takeharu	慶應義塾大学	19世紀東アジアの国際秩序と「万国公法」受容—日本の場合—
韓国	韓 承勳	Han Seunghoon	高麗大学	19世紀後半、東アジア3国の不平等条約克服の可能性と限界
中国	孫 青	Sun Qing	復旦大学	
中国	呉 義雄	Wu Yixiong	中山大学	「華夏と夷狄」から「中国と西洋」へ：19世紀前期における中国の西洋に関する論述パラダイムと情報戦略
第3セッション：伝統への挑戦と創造 司会：村和明（東京大学）				
日本	大川 真	Okawa Makoto	中央大学	18・19世紀における女性天皇・女系天皇論
韓国	南 基玄	Nam KiHyun	成均館大学	日本民法の形成と植民地朝鮮での適用:題令第7号<朝鮮民司令>を中心に
中国	郭 衛東	Guo Weidong	北京大学	伝統と制度の創造：19世紀後期の中国の洋務運動
第4セッション：国境を越えた人の移動 司会：彭浩（大阪市立大学）（予定）				
日本	塩出 浩之	Shiode Hiroyuki	京都大学	東アジア公共圏の誕生：19世紀後半の東アジアにおける英語新聞・中国語新聞・日本語新聞
韓国	韓 成敏	Han Sungmin	大田大学	金玉均の亡命に対する日本社会の認識と対応
中国	秦 方	Qin Fang	首都師範大学	近代中国女性のモビリティ経験と女性「解放」に関する再思考

※一部公募＜応募者への要望＞

上記のテーマで発表・討論したい方は、およそ2000字で発表要旨をお寄せください。その中から国境を越えた対話にふさわしいものを選びます。ただし、論文の執筆にあたっては、外国の類似分野の研究者、あるいは自国の他分野の専門家に分るようにご配慮ください。同種の問題が隣国にも存在し、それゆえに対話が可能となること、同時に国家間の異同や解釈の相違が浮彫りとされること。それを通じて、参加者の間に知を共有する新たなプラットフォームが生れ、将来の知的協業が始まることを期待しています。

【自由討論】

第5セッション、第6セッション 司会：劉傑（早稲田大学）

■招待討論者

【日本】青山治世（亜細亜大学）、平山 昇（九州産業大学）

【韓国】朴 漢珉（東国大学）

【中国】孫 衛国（南開大学）

■実行委員会

①コアメンバー

宋志勇（南開大学）、趙琬（国史編纂委員会）、三谷博（東京大学名誉教授）、劉傑（早稲田大学）

②サポートグループ

李恩民（桜美林大学）、徐静波（復旦大学）、村和明（東京大学）、彭浩（大阪市立大学）、孫軍悦（東京大学）、南基正（ソウル大学）、金範洙（東京学芸大学）、金キョンテ（高麗大学）、鄭淳一（高麗大学）、閔東曄（東京大学）、梁奕華（東京外国語大学）

③同時通訳（できるだけ同じ人をお願いする）

日本語⇄中国語：丁莉（北京大学）、宋剛（北京外国語大学）

日本語⇄韓国語：李へり（韓国外国語大学）、安ヨンヒ（ソウル外国語大学院大学）

中国語⇄韓国語：金丹実（フリーランス）、朴賢（京都大学）

④事務局（渥美財団） 今西淳子、角田英一、本多康子

⑤論文の翻訳と校正 早稲田グループおよび渥美フェロー翻訳サポート

日本語⇄韓国語 日本語⇄中国語 韓国語⇄中国語 各 6 人 基調講演もいれて計 20 人
できるだけひとり 1 篇だけに。

⑥予稿集の編集 日本語版：長井亜弓、韓国語版：閔東曄、中国語版：梁奕華

⑦レポートの編集 日本語版：長井亜弓、韓国語版：閔東曄、中国語版：梁奕華

■タイムライン

2018 年 10 月から	発表者のミニ公募
12 月末まで	募集締切(発表要旨の投稿)
2019 年 3 月末まで	発表者の決定、一般セッションの発表者の選考も兼ねる
4 月末まで	演題、発表要旨、略歴提出
7 月末まで	発表論文（フルペーパー、所定のテンプレートに準拠【日本語：10,000 字以内、韓国語：10,000 字以内、中国語：8,000 字以内】）提出
10 月末まで	日中韓三か国語に各論文を翻訳
12 月上旬	会議資料送付、および予稿集作成
2020 年 1 月 8 日から 12 日まで	第 4 回「国史たちの対話」円卓会議(第 5 回アジア未来会議@フィリピンの日程内で開催)
1 月末まで	既出の発表論文の修正および改稿
9 月末まで	レポート(論文集)の編集と発行

■その他

- ・ アジア未来会議参加者は誰でも参加（聴講）できる。（当日参加者はアジア未来会議の参加費を支払う必要あり）